

『陽だまりに吹く風』

著：吉原理恵子

ill：緒田涼歌

■□プロローグ□■

午後七時。

華やかなイルミネーションに彩られた夜景を眼下に一望できるスカイラウンジがウリの、シティー・ホテル。

最上階にあるフレンチ・レストランはドレス・コードありの、シックで落ち着いた雰囲気の高級店である。

フロアを行き交うボーイの身だしなみも立ち振る舞いも洗練されており、厳選された食材と熟練した一流シェフの感性によってテーブルを飾る料理は、自ずと客を選ぶ。金銭面でも、マナーでも。さすがに、年齢制限だけは除外されているようだったが。

それでも、この『エウローザ』は、ディナーの予約は最低でも一ヶ月待ちなど珍しくもないほどの人気店であった。

そんな高級レストランで、月に一度、彼は女と二人でテーブルを囲む。

「ねえ、ジュリアン。あなた、幾つになったのかしら？」

普段は滅多に意識したことのないミドルネームで当て付けがましく彼を呼ぶのは、目の前の女だけだ。

初めてその名前で呼ばれたとき、

『それって、いったい誰のこと？』

一瞬、ポカンと目を瞠ったことを覚えている。

戸籍上は、確かに、きちんと明記されているが。日常生活ではそんなものは必要ではなかったし、自分の持ち物にフルネームで書く名前はもちろん漢字だけで、誰も彼をそんな名前と呼んだことはない。

そんな彼のリアクションがよほどおかしかったのか、それとも、笑いのツボにハマるほどお気に召したのか。女は、高らかに声を上げて笑った。

後にも先にも、女がそんなふうに笑ったのを見たのはそのとき限りだ。

だから、だろうか。出会ったときから、女はその名前でしか彼を呼ばない。

違和感と。

不快感と。

——忍耐力。

最初は、どうにも顔が強ばったが。今では、その名前で呼ばれることの嫌悪感にも慣れた。

慣れることへの抵抗感がなかったといえば嘘になるが、それ以外、彼の選択肢はなかった。女には、彼をそれ以外の名前で呼ぶ意志がなかったからだ。

舐められている。

オモチャにされている。

その——不愉快さ。

けれども、彼は、女の押し付けがましさに慣れるしかなかった。

「十五歳ですけど」

「あら。もう、そんな？」

ワイングラスを優雅に傾け、

「月日が過ぎるのって、ほんとに早いわねえ。歳を取るはずだわ」

リップグロスのテカる肉厚の唇で大仰に驚いてみせる仕種はいかにも芝居じみていて——滑稽だ。

むろん。顔には出さないだけで彼がそう思っていることなど、女にはお見通しだろう。

なにしろ、人生の経験値が違う。

女の年齢をハッキリと聞いたことはないが、単純計算しても、彼の三倍くらいにはなるだろう。そうは見えない張りのある若々しさと美貌にどれほどの金と時間を注ぎ込んでいるのか、それは彼の知るところではなかったが。

「だったら、高校受験ね」

「はい」

「志望校は決まっているの？」

「いろいろ考えています」

彼の口調に淀みはない。

「そう……。高校はやはり、その先を見据えて慎重に選ばなくてはダメよ？」

「——はい」

「三年間なんて、アツという間ですもの。有意義に使わなくてはね。フラフラよそ見をしている暇はな

いわ」
彼は返事をする代わりに小分けしたステーキを静かに頬ばり、そのレアな舌触りをゆっくりと味わう。物を食べているときだけは、無駄口を回避できるからだ。視線を合わせる必然性もない。無理に愛想笑いを浮かべなくても、料理が美味ければ自然と笑みがこぼれ落ちてくる。適度なおしゃべりと熟成したワインは料理の旨味を引き出すエッセンス——かもしれないが、彼にとっての一番は、程よい沈黙であった。そうすれば、純粋に食事だけを楽しむことができる。よけいな蘊蓄はいらない。ゆったり、と。しなやか、に。あくまでも品良く。——堪能する。

もしかしたら、彼の食事マナーは、束の間の沈黙によって磨かれているのかもしれない。だとしたら、皮肉という以外にないが。女は、話の腰を折られても眉ひとつひそめはしなかった。ただ、唇の端をほんのわずか吊り上げただけで。そうして、彼がミネラルウォーターのグラスに手を伸ばすのを待ち構えていたように、「次に逢うときには、志望校くらいは聞かせてもらえるのかしら？」それを口にした。

「——たぶん」
明言を避けて、彼はグラスを傾ける。「……そう。楽しみね」
白々しいほどニッコリと、女は極上の笑みを浮かべる。そういうとき、彼は、自分の視界が少しずつ狭まっていくような閉塞感を覚える。とりあえず会話はあがるが、中身はない。こういうのを『茶番』というのではないのか？
こんな息苦しくて寒々しいだけの会食に何の意味があるのか、彼は知らない。いや——知りたくもない。
月イチの食事にあえて何かの意義を見いだそうとするなら、『月替わりで高級フランス料理がタダで食べられる』それに尽きる。
バカバカしいと思うようなことでも、慣れてしまえばずいぶんマシになる。とにかくにも、未成年である彼には女の退屈しのぎに付き合う義務がある。それが、日々の平穩を掻き乱されないための唯一の条件だからだ。



弥生——三月。
冬の寒さが綻びて、ようやく暖かな風が吹いても。冷たい大地の中から虫が這い出し、可憐な花芽が顔を覗かせても。まだ、ふとんの温もりが恋しい——春暁。
かの清少納言は、『春の夜明けは格別の情趣がある』
そう、宣ったそうだが。十五歳の春は、謂わば人生最初にして最大のイベント——受験闘争の真っ只中。



コン、コン、コン。
ドアは、律儀にノックされる。別に、慌てて隠さなければならぬモノは何もないのだが。彼女には、そこは彼のテリトリーだという認識があるのだろう。それでも、返事を待たずにドアを開けて中に入ってくるのはいつものことだったが。「……ねえ」
ココアを入れたマグカップと卵サンドをのせたトレイを机の端に置いて、彼女はおもむろに切り出す。「——なに？」
「先生も言ってたけど、やっぱり、私立も受験してみたら？」
「いいよ。別に、公立一本で」

先日の三者面談を終えてから、いずれ、彼女の口からその話が出るのも時間の問題だと思っていたので、彼は素っ気なく返事をする。

「でも……」

「行く気もないのに滑り止め目当てで受験したって、意味ねーよ」

変に意固地になっているのではなく、彼的には本気でそう思っているのだが……。

今どきの高校受験の常識は、きちんと滑り止めの保険をかけておくのが鉄則である。

子どもを中学浪人にさせたくないのは親も教師も同じである。本音の部分では、その理由に大きなギャップがあるかもしれないが。

どうしてもその高校でなければならぬ事情があれば、公立との併願ではなく私立一本に絞った専願受験という手もある。受かるかどうかは、別にして。

――が、それには様々な意味でたいそうな金がかかる。

我が家の経済状態を思えば、高望みをせず……今は特別にやりたいことがあるわけではないので、とりあえずごく普通に公立一本でいいのではないかと思っている。

「だから、本番前の手馴らしてというか、受験の雰囲気みたいなものを経験しておくだけでもいいじゃない」

「受験料がもったいない」

「あんたねえ。ウチにだって、それくらいの余裕はあるわよ？」

真剣に、彼女はそれを口にする。冗談で流す余裕がないところが、すでに、言わずもがな……ではあるが。

彼女にとって、自分のことは二の次。まずは、彼のことが最優先。言葉の端々にも、それが窺える。

素直に、ありがたいなと思える。

反面、その事実がほんの少しだけ面映ゆい。変にベタベタとしたスキンシップなどは皆無だが、それでも、掛け値なしの情愛を注がれている自覚はあるので。

「んじゃ、その分、俺の小遣いに上乘せしてくれてもいいけど？」

「それとこれとは、話が別」

ピシャリと、予想通りの言葉が返ってきた。シビアな現実である。

「無駄に金捨てるくらいなら、俺に貢いだ方がよっぽどマシじゃねー？」

「そういうのは、屁理屈って言うのよ」

ガキの屁理屈は、大人のやせ我慢と同じだ。シガラミが少ない分、屁理屈の方がマシのような気がするが。

けれども。これ以上、下手に突っ込むと説教モードに突入してしまいそうな気がして、

「へいへい……」

――口を噤む。

滑り止めで受験して、それで、もし合格したら、更に別の名目でまた金を支払うことになるのだ。それだけは間違いのないことで。しかも。それは、本命が合格したからって返金されるわけではない。

受験料は、まあ、しかたがないとして。掛け捨てで数万円は、痛い。

いくら滑り止めの保険だからって、そりゃ、いくらなんでもボリすぎだろ……とか思うのだが。親心としては、それも必要経費でやむなし――なのかもしれない。

そこに付け込む受験制度の姑息さを、未成年の子どもがアレコレ言っても始まらない。

いや。世の中、そんなことまで考えている受験生の方が珍しいのかもしれないが。

「もしかして……。俺の実力、疑ってる？」

茶化すようにそれを口にするのと、

「違うわよ」

彼女は小さくため息をついた。

「あんたの実力ならもっと上を狙えるんじゃないかって、思ってるだけ」

確かに、模試判定では志望している公立校よりハイレベルな私立校も合格予想判定圏内には入っていたが。

とにかく、公立も私立も第三志望までは書けと言われて。それなら、書くのはどうせタダだし……のノリで書いた名前だった。

――が、それはあくまで、なんのプレッシャーもない校内模試だったからだ。

（まさか、度胸試しのダメ元で聖明学園を受験してみろ――とか、言わないよな）

普通、滑り止めは、万が一の絶対確実を期して本命よりもワンランク下を受験するのが鉄則なのだ。なぜか、いやあな汗が滲み出てくる。

「だったら、この際、チャレンジしてみるのもいいんじゃない？」

「変なプレッシャーかけるなよ」

どんよりとため息を漏らして、彼は卵サンドにかぶりついた。

よくよく考えてみたら、彼女がチャレンジ精神旺盛な、いや――ポジティブ思考の実践主義者であるこ

とを忘れていた。
やってもみないうちから白旗を掲げるな。
そのスローガンには何の異存もなかったが。それはまた別の機会に——と思わずにはいられない彼だった。



集中力。
くつろぎ。
動機付け。

限られた時間内での受験勉強のやり方は、人それぞれだが。忍び寄るプレッシャーは否応なく視界を圧迫し、孤独感を掻き立てる。

焦りと。
苛立ちと。
——開き直り。

日々は、秒刻みで過ぎていく。



リビングのドアをノックもせずに入れて入ってくるなり、

「学区内の公立高校を受験するそうだな」

男は、どっかりとソファに腰を下ろした。

普通、約束の時間に遅れて一時間以上も人を待たせたなら。まずは『スマン』の一言くらいあって当然だと思うが、男に対して、彼はそんな常識も歩み寄りも期待してはいなかった。

自分の主義主張を押し付けるのも。

人の都合を顧みないのも。

男にとって、そんなことは日常茶飯事——だった。

だから。彼は、ただ黙して強すぎる視線を返しただけだった。

——とたん。

男の目がわずかに細められた。

それだけで、たいていの連中はビビって腰が引けてしまうだろうが、彼にとってはすでに見慣れた日常でしかなかった。

居直りではなく、ただの事実確認。何年経っても、何も変わらないということの。

「私は、桐生学院を受けると言ったはずだが？」

目で、口で、高飛車に威嚇する。

それも今更なことなので、黙殺する。言葉の通じない相手には何を言っても無駄だと、知っていたからだ。

『言いたいことは、きちんと言葉にしなれば通じない』

『わかってもらいたいと思うなら、言葉を惜しむな』

『相手に自分を理解させたいなら、まず、自分が相手を理解する努力をすべきだ』

それが世間様の常識でも、この家の規範は違う。

男には、誰も逆らわない。

——逆らえない。

それが、暗黙のルールだからだ。

バカバカしいほどの時代錯誤。

腹の中では、誰もがそう思っているはずなのに。皆、口には出さない。

逆らって、バカを見るより。

刃向かって、男の逆鱗に触れるより。

おとなしく、言われるままに従っていた方が得だと思っているからだ。

だから、彼は今、この家を出て祖父母の許にいる。男と一緒にいる限り、彼もそのルールに縛られるからだ。男にしてみれば、それも大いに気に入らない現実だろう。

彼の強固な意志と祖父母の理解がなければ、それも叶わなかっただろうが。

「我が家では、男子は皆、桐生を出て系列の大学部に進学するのが決まりだ」

耳タコどころか、すでに耳化石である。

日常会話は日本語なのに、男とはまったく会話にならない。

誤解でも曲解でもなく、言葉では意思の疎通が図れない。

——最悪である。

親子代々、伝統はそうやって受け継いでいくものだ」と男は頑なに盲信している。自分がやってきたすべてのことは、当然、我が子に受け継がれていくべきだと。

だから、言葉が通じないのだろう。

それが、腹立たしくて。

ただ……苛立たしくて。

何をどうすれば、自分の話を聞いてもらえるのかわからなくて——身悶えする。

けれども。身体中の血が逆流するような憤りも、吐息が灼けるようなジレンマも、そういうことすら男には理解できないのだと思い知らされたとき、彼は、言葉を捨てた。

生まれ落ちた瞬間に、すでに目の前には『家訓』という名のレールが敷かれている。そこからハミ出すことは自由を勝ち取るのではなく、自己責任を放棄するただの負け犬なのだ、さんざん言われてきた。

負け犬——という名の選択の自由があることなど、男は考えたこともないのだろう。

だから。彼は、あえて地元の公立高校を受験することでその『負け犬』を選ぶことにしたのだ。言葉の通じない男の目にも、それとハッキリわかるように。

男には、二度と自分の視界に入ってきて欲しくない。

その決意を込めて、だ。男は、それをガキの戯言だと鼻先で嘲笑うかもしれないが、彼には自分を曲げて男に屈服する気など微塵もなかった。

ブチまけて言ってしまえば。男の意に逆らって確信犯の恥曝しになるのであれば、桐生以外のどこでもよかった。

だが、その高校を選んだのには理由があった。彼が唯一認める友人が、そこを受験すると言ったからだ。だったら、彼に否はない。

自分の人生に自由意志以外のシガラミなど何ひとつとして必要とはしないが、同じ目線でタメを張れる友人の存在はまったく別モノだ。

予想も期待もしていなかった、人生のターニング・ポイント。

そんなものが、現実にあるとは思わなかった。

ある日、突然、それが目の前に落ちてきたときの……衝撃。

語るべき言葉を見つけたときの、興奮。

そして。理解されることの——喜び。

中学時代の三年間で、彼は、その稀少な存在を手放せなくなってしまった。

「——わかったな」

恫喝のこもった低い声で一言漏らすと、男は、それで用が済んだとばかりにソファから立ち上がった。

「いいかげん、目を覚ませ。くだらんダダをこね回すな。見苦しい」

それだけ言い捨てると、男はさっさと部屋を出て行った。

男が彼の視界から消え失せてしまうと、それだけで室内の空気がずいぶん軽くなったような気がした。それがただの錯覚ではないことを、彼は否応なく実感する。

そうして。その体感温度の差が、取りも直さず自分と男の埋めがたい亀裂であることを再確認して、彼はほんの少しだけ唇を噛んだ。



桜は見事に咲くのか。

無惨に散る……のか。

岐路に立つ選択肢は様々あるが、同じ条件での勝敗は白か黒かの二者択一である。笑う者がいれば、その裏で泣く者がいる。

予定された『シナリオ』も決まりきった『セオリー』もないのが人生の醍醐味であり王道である。そこに『絶対』の確約はない。



最後の最後まで、彼は高校受験の本命をどこにするか……迷っていた。

二人の親友は、迷う素振りも見せずにさっさと志望校を決めてしまったようだが、彼は、今ひとつ本命を絞り込めずにいた。

なにしろ。中三の一学期が終わるまでめいっぱい部活をやって、夏休みになってようやく本格的な受験勉強モードに入ったのだ。

そこで、いきなり、

『さあ、どこだ?』

——とか言われても、なかなかスイッチが入らない。

ONとOFF。

集中力とリラックス。

気持ちの切り替えが早いのが彼の身上であったはずなのに、ずっと打ち込んできた部活もついに終わってしまったと思ったら、なんだかやる気も一緒に削がれてしまった。

『燃え尽きるには早すぎるだろ、自分ッ！』

わかっているのに.....。

『これからが本番だぞッ！』

スタートラインでの仕切り直しで躓いている。

マズイ。

ヤバイ。

——どうしよう。

気ばかり焦って、空回りをしている気分。

だいたい、今、自分がどの程度の学力レベルにいるのかも.....わからない。そのせいか、

「部活も終わったんだから、夏休みは塾の夏期講習に行って受験勉強に集中しなさい」

学期末の成績表を見た親は、やたら口うるさい。

それを愚痴ると、友人たちは、

「家で、ダラダラしてるよりもいいんじゃないか？」

「まあ、メリハリはつくかもな」

「自分でシコシコやるより、おまえは目の前にライバルっていう仮想敵があった方が燃えるんじゃないか？」

「.....かもな。とりあえず、自分より上の席次の奴を蹴り落としていくっていうゲームだと思えばいいし」

「ありがたく、夏期講習に行かせてもらえ」

「選択の余地があるほど余裕ねーだろ、おまえ」

言いたい放題吐きまくってくれた。

夏期講習に行けと人の尻をバシバシ叩きまくる二人が塾通いをしているかというところとまったくそうではないから、よけいにムカつく。余裕のないのが自分だけのような気がして。実際、そうなのかもしれないが.....。

「おまえら、なんでそんなにあっさり決めちまえるわけ？」

ついには、本音が飛び出す。

「まあ、しいて挙げれば消去法？」

「はあ？」

「選択肢でダメそうなところから潰して行って、残った中から最良の一番を取っただけ」

しごくあっさりとしてそれを口にする友人は、母子家庭だ。

こいつがなんでもなしのことのようにそれを言うと、自分がいかに恵まれているか——今更のように痛感せずにはいられない。

しかし。

「俺は、今になってもまだフラフラしてるおまえの優柔不断に呆れ返る」

もう一人の片割れにそれを言われると、妙に腹が立つのは.....なぜだろう。

本当のことしか言わないからか？

それとも、自分が思っていることを、見透かされているような気分になるからか？

「俺たちよりもおまえの方が、行きたい方向性がバッチリ決まってると思ってただけ？」

「ぶっちゃけ、部活絡みで本命とか.....ないわけ？」

「推薦もらえるほどの実績、残してないからなあ」

いいとこ、地区大会三位止まりの現実は厳しい。中体連の県代表とかになれば、それこそあいつのように引く手あまたかもしれないが。

「けど、行きたいところはあるんだろ？」

「んー.....たぶん、無理」

「なんで？」

「実力が違いすぎる」

「頭の偏差値が？ それとも、部活のレベルが？」

遠慮もなくズバズバと切り込んでくるそいつがまともに高校受験をする気になったというだけで、周囲はブツたまげ——だった。

行ける高校、あるのかよ？

内申書、最悪だろ？

それって.....どこだよ？

だが、彼に言わせれば、そいつの中で何かのケジメが付いてようやく本気モードになっただけ——だろ

う。
それで、そいつの志望校がもう一人の奴と同じだと知り、
（.....やっぱりなあ）

しごくすんなりと納得できてしまった。
二人が行くなら、自分も同じところを受けてみようか？
そういう安易な決め方は、やっぱりマズイだろうか？
ふと、それを思わないでもなかったが。

「んじゃ、とりあえずは、九月の学校見学の枠をめいっぱい使って絞り込んでみたらどうだ？」
自分たちの中では一番の常識人（.....たぶん）がそう言うので、
「おう。百聞は一見にしかず——とか言うもんな」

つい、その気になる彼だった。



天災も人災も、忘れた頃にやってくる。
どれだけ頑張っても、アクシデントはある。

神頼みで、そうそう『ラッキー』は舞い降りてはこないが。それでも、『運』の善し悪しが実力を左右
することもある。

春疾風。
春眠あかつきを覚えず——どころか。満開の春には、まだまだ遠い。

そして。
——本番。

いやが上にも高まる緊張感で、大した理由もなく、ふとした弾みに視界の中の見知らぬ他人が皆、
『自分よりデキる奴』
——に見えてくる日。

『努力は結果を裏切らない』
心底.....そう思いたくなる日。
『やるだけやったのだから、結果はあとから付いてくる』
むしろ。それくらいの開き直りは必要かもしれない。
この時期になると、なぜか、不思議に天候も荒れる。

そんな有り難くもないジंकス通り、その日は、いきなりブリ返した寒波に身を震わせながらの最悪な
受験日となった。

自分以外は、皆ライバル。

けれども。

こんなときでも、制服に埋没しないキャラクターは確かに存在するものなのだろう。

「うわ.....。あいつら、なんか——迫力う」

「あそこだけ、空気違うんだけど.....」

「絶対、ただのパンピーじゃねーよな」

ざわつく視界の中の吸引力——とでも言おうか。

「ねえ、見て見て、あのロン毛の彼」

「カッコイイ（ハート）」

「背え、高くて。足、長ーい」

「あたし.....断然ヤル気出てきちゃった」

囁きは止まらない。

そこかしこで、ざわめきが伝播するように。

「なあ、おい。あれって.....南中のヤンキーじゃねー？」

「あー、ホントだ」

「ゲェ.....。あいつら、マジかよ？」

「冷やかしたろ、冷やかし。あんなのが受かるわけないって、絶対」

そうして。

断は下される。

それぞれの悲喜こもごもを引き摺って。

桜花爛漫。

各々が人生最初のハードルに様々な想いを託し、笑顔あり涙あり、それなりの事情を胸に抱えて迎えた十五歳の春。

多大なる期待とささやかな不安で緋い交ぜになった程よい緊張を真新しい制服に包み、それぞれが新たな高校生活の第一歩を踏み出していく。

頬を撫でて吹き渡る風も、そんな新しい門出を祝福するかのようふうわりと優しくった。



そして、一ヶ月後。

中ノ澤高校の新一年生としての自覚と親睦を深める——ことを目的としたわりには、めちゃくちゃハードなスケジュールで三泊四日のオリエンテーションを無事に乗りきり。ソワソワと浮き足立っていたクラスの雰囲気も、ようやく、それなりの落ち着きが見えはじめた頃。

——だというのに。

一時間目終了のチャイムが鳴ったとたん、

「ふ...あぁあ.....」

生あくびを噛み殺す千堂一真は、早くもお疲れぎみであった。

(はぁ.....。次は数学かぁ。居眠りもできないって。ホント、最悪.....)

朝イチから居眠りモードに突入すること自体、問題ありありなのだが。ともすれば睡魔の誘惑に駆られそうになる一真の頭からは、そんな常識さえもがスッポリと抜け落ちてしまっている。

(——眠い)

どんよりとため息を漏らして机上の教科書を片付けながら、また.....あくび。

(.....マズイ)

そのたびに潤んで半ばトロリとした双眸を、根性でこじ開ける。

(マジでヤバイんだけど.....俺)

すると。

「なあに、千堂君。きょうは朝からナマあくび連発だね。.....寝不足？」

となりの席の富樫玲香がいきなり声をかけてきた。

(え.....?)

思わず、一真は目を瞠る。

いったい、いつから、見られていたのだろうか.....と。

(マズったなぁ)

別に、授業中に大あくびを連発していたわけではないが。それでも。ほんの間近でボケ面を曝していたのかと思うと、何やら決まりが悪くて。

これが富樫ではなく男子相手なら、もっとすんなり、軽口まじりのジョークにしてみましたのかもしれない。おちゃらけたトークが得意なわけではないが、とっさのアドリブがきかないほど不器用なタチでもない。

だからといって。今更、取って付けたような恰好をつけるわけにもいかず。いや.....そう思うこと自体、すでに、特に意味もなく富樫を意識しているような気がしてきて。

「.....んー、まぁ、そんなとこ」

曖昧に言葉を濁して、一真は苦笑する。

そうすると。いっそサバサバと刈られたショート・ヘアのせいで普段はやや鋭角的に見える面差しが、思いがけず柔らかくなる。

そんなわずかな変化が思いもよらなかったのか、富樫はほんの少しだけ息を呑んだ。

もともと、一真は、クラスの中でもそれほど体格的に目立っている方ではない。身長は一六五cmには届かないし、華奢ではないが厚みのないスレンダーな体型は既製の制服の中で若干泳いでいる。

これから先の成長期を見越して、少し大きめのサイズを選んだわけではない。今着ているサイズが一番小さかったのだ。

入学式当日。同じ中学から進学した友人たちは、一真の顔を見るなり、

「似合わねえ.....つー以前の問題だよな。千堂、やっぱ、おまえ、中学ンときは変形短ランだったんだろ？」

「まぁ、外見が変わっても中身が千堂だしな。そのうち、慣れるだろ」

遠慮もなくズケズケと吐きまくってくれた。

学ランのときはまだしも誤魔化しようがあったが、ブレザーが似合っていないのはすでに自覚済みである。

ブレザーを着こなすには、それなりの肩幅と厚みがないと中身が泳いで不格好になるものだと、一真は、友人二人を見て嫌でも実感してしまった。今更、無い物ねだりをするだけ無駄なことも。

そんなわけで。ハッキリ言って、俺が俺が……の出たがりでもなかったし。休み時間になると屯ってバカ騒ぎに興じるタイプでもなかった。

かといって。いかにもありがちな優等生には、まず見えない。くっきりとした二重瞼の双眸に、眼力がありすぎるからだ。

育ちのよすぎる今どきの高校生に比べて体格的には並以下でも、クラスに埋没しない確かな存在感がある。無愛想な強面タイプとは程遠いのに、イマイチ気軽に声はかけにくい。そういう特異な視界の吸引力が。

恰好を付けて孤高を気取っているわけではなさそうだが、一人でいることに何のこだわりもないタイプ？

クラスでことさら浮いているわけではないのに、別の意味で変に悪目立ちをしている？

千堂って、ホントにどういう感じ？

クラスメートが一真に抱いているイメージは、だいたいがそんなところであった。

なのに――である。

「勉強……なワケないか。学力テスト、終わったばかりだもんね？」

クラスで……いや、一学年の中では『ベスト5』に入る美少女だと言われている富樫はけっこう気さくな性格で、一真に対しても物怖じしない。

最初の学活での自己紹介のときに、

『趣味も特技もバスケットボールです』

きっぱり言い切ったあたり、外見よりははずいぶんと活発な性格なのだろう。

体育会系な富樫と並ぶと、身長は一真の方が低い。もしかなくても、体重でも負けているだろう。

だから――何？

……というわけではないが。自分よりもデカイ女子に対する苦手意識も妙なコンプレックスも、一真にはない。

「いや、いろいろと……。なんたって、お年頃ですから」

とたん。

富樫は。

そんな切り返しなどまったく予想もしていなかったのか、一瞬驚いたように目を瞠ると、いきなりプツと噴いて遠慮もなく笑い転げてくれた。

（そんな……派手に笑わなくても）

一真的には、特にウケを狙ったつもりはなかったのだが……。いったい、何がマズかったのだろうか。

周りの連中は、

『いったい、何事？』

――とばかりに、一斉に二人を見やるし。

どうやら、思わぬツボにハマってしまったらしい富樫は富樫で、笑いすぎて涙まで出てきたらしく。終いには、

「あー、やだあ……。千堂君、お茶目すぎ」

しきりにハンカチで目元を拭いている。

お茶目――？

投げつけられた言葉の思いがけなさに、一真はわずかに目を眇める。

――クソ生意気。

――顔に似合わず、ふてぶてしい。

――可愛げがない。

そんな台詞はすでに耳タコだが、さすがに『お茶目』は初めてだった。新鮮すぎて耳慣れないというより、違和感バリバリ……。

（富樫って……けっこう天然？）

一真の何を、どこを見てそんな言葉が出てくるのか……謎だ。富樫の感性も、他人とは少しばかりズレまくっているのかもしれない。

中学時代。一部男子を除き、ほとんど最小限のことしか話しかけてこなかったクラスメートのことを思えば、こんなふうにあっけらかんと、しかも女子相手に冗談まじりの会話が交わせるようになるとは思ってもしなかった。

あの頃の自分と、今の自分。

義務教育という名目で一律に抑圧される『中学生』から、少しはマシな自由が選べる『高校生』になっただけで、一真自身、劇的な変化があったわけではない。

――と、思う。

環境の変化に乗じてリセットしたい過去があるわけではないから、とりたてて猫を被る必要もないし。

今の自分で、何の不都合もない。

してみれば、やっぱり……。

(もしかして、あいつのせいだったりすんのかな)

一真はひとつため息を落として、頬杖をついた。結果オーライ……とでも言えばいいのか、富樫の爆弾発言(?)のせいで、すっかり眠気も吹っ飛んでしまった。

寝不足ではないが、なんとなく疲労感が抜けない。

タルい。

ナまる。

シマリがない。

ダれる。

ハマる。

ヨドむ。

今ひとつ、どうも、いつもの調子が戻らない。

その原因ならば、単純すぎるほどに明快だった。

なぜなら、何の因果かが知らないが、入学早々、とんでもなく規格外な大型犬(そういうたとえもどつかと思うが、ほかに適当な言葉が見当たらない)にどっぷり懐かれてしまったからだ。

高校生になって新しい友人関係の輪を広げることに関しては、一真自身、なんら異存はないのだが……。まさか、いきなり初っ端から、季節外れの台風もどきにブチ当たるとは思ってもみなかった。

思いがけないハプニングと予想もつかないアクシデントでは、その衝撃度も被害状況もまるで違う。それを思うと、

(なんで、こうなっちゃうかなあ)

——なのだった。

そもそもの出会い……を語るにはかなり一方的にはなるが、初めてそいつを認識したときの印象は、かーなーり、強烈だった。

なにしろ。厳粛なムード漂う入学式で、正々堂々と居眠り——いや、爆睡していたのだ。

そんな大胆不敵……常識外れなことはやろうと思ってできることではない。どんなに退屈な席でも、普通はせいぜい、唇の端であくびを噛み殺す程度である。

——が。

そいつの神経は並みではなかった。

来賓が次から次へと退屈窮まりない祝辞を長々とブツ間、ひたすら眠りこけ。ついには、そんな決まりきった芸のなさを野次るかのように派手な物音を響かせて椅子から転げ落ち。それで、ようやく目が覚めたかと思いきや、寝惚け眼のままのっそり起き上がり、なんと、特大の大あくびを一発派手にカマしてくれたのだった。

啞然。

呆然。

ただ……絶句。

『ありえねーだろ、フツー……』

その場にいた者たちの、それが正直な気持ちだった。

いや。

もう……。

緊張感の欠片もない——常識外れの物ぶりにも誰もが呆れるのを乗り越えて笑うしかない状態で、館内、爆笑の渦である。

息子の晴れ姿を見にやってきただろうそいつの親は、きっと、穴があったら潜り込んでしまいたい心境だったに違いない。

さすがに、学校関係者も、晴れの入学式で怒鳴り声を張り上げるわけにもいかなかったのだろうが。露骨なほど苦々しい顔付きだったのは、言うまでもないことであった。

よかったのか、悪かったのか。とにもかくにも、その日が一生忘れられない入学式になったのは事実だ。

あとで聞いた話では、その日のうちに早速そいつは校長室に呼び出され、こっぴど、ギューギューに説教をくらった——らしい。

だが、その後もまったく変わる事のないノーテンキさを十二分に発揮しているところを見れば、たぶん、校長の説教も『馬の耳に念仏』だったのだろう。

馬の耳に念仏。

暖簾に腕押し。

糠に釘。

受験勉強でも暗記したことのないような格言がスラスラと出てくるのも、たぶん、そいつのせいだ。そいつを見ていると、その言葉の意味が嫌でも実感できた。

いや。
まさか……。

実感はできて実体験するハメになるとは……さすがの一真も、まったくもって思いもしなかったわけだが。

そんなこんなで。入学早々、よくも悪くも、そいつは中ノ澤高校の超『有名人』と化してしまった。

一真にしてみれば、クラスも違っていただけではあるし。そのときはまだ、

(あいつ……かなり天然が入ってんじゃないか?)

ごくごく普通の、ただの傍観者でしかなかった。

好奇心は人並みだったがそのベクトルは限定されていたし、ワイドショー的な噂話にはまったく興味がなかった。

第一。わざわざ聞き耳を立てなくても、彼に対する情報は同じ話題で盛り上がりたいクラスの女子が一方向的に垂れ流しにしてくれる。

だが。その手の話はあくまでも尾ヒレつきまくりの噂でしかなく、いったい何が本物で、どれが作り話なのかもわからない。

同じ男として、ズバ抜けて均整の取れた長身がことさら羨ましかったわけではないし。学年差を問わず、女子が嬌声を張り上げてミーハーに騒ぎ立てる派手な相貌に嫌味のひとつもつけてみたかったわけでもない。

たとえ、軽くウェーブがかかった茶髪を天然パーマだと言い張ろうが。それを後ろでひとつに編んで垂髪にしようが。ド派手なカチューシャをしたまま登校しようが。そんなのはあくまで個人の趣味であって、それだけ堂々とやっているのに、今更『風紀』だの『校則』を持ち出してアレコレ言うのもアホらしくて。一真的には、

(似合ってるや、別にいいんじゃないの?)

——だし。

おまえ、高校の登校時間はフレックスじゃねーんだよッ！——の遅刻魔だろうと。時々、ケバいオネーサンが運転する外車で仲良く同伴登校しようと。それは、本人の自覚の問題であったし。

(他人に迷惑かけなきゃ、あとは自己責任でいいんじゃないの?)

ときおり彼が視界の端を派手に騒がせるのも、すでに日常の範疇でしかなかった。

どんなに物珍しい光景でも、見慣れてしまえばそれが『フツー』になってしまう。慣性の法則とは、そういうことかもしれない。

が——しかし。

そうやって傍観者の余裕をカマしてられるのも、我が身に実害が降りかかってこない場合だけ——なのだと、今更のように一真は痛感する。

まあ、それを口にしたらしたで、一真をよく知る者たちには、

『なんだよ。らしくねーな』

一笑に付されてしまいそうだったが。ただの冗談でなく、とにかく、疲れる。馴染みのない疲労感にどっぷり……机にしがみつきたくなるほどだった。

存在自体が超ド派手な目立ちまくりの『有名人』に、とことん懐かれてしまう不運。

他人が、それをどう思っているのかは知らないが。一真に言わせれば、その煽りをくって自分の名前が自分の知らないところで面白おかしく取り沙汰されるのは不本意の極みであった。

いや。そういう噂的的にされるのは初めてではなかったし、他人に何を言われても事実と違ってれば、

『また、バカな奴らが好き勝手ほざいてるぜ』

スッパリと切り捨てにできるくらいには、一真も余裕だったが。一番の問題点はそういう外野の雑音ではなく、ごく普通の『友人』関係を逸脱してあまりある、そいつのハンパでない懐き方なのだった。

とりあえず、そいつなりに『時』と『場所』は選んでいるようだが。そのわりには、人の都合などまるで構いなしで。挨拶代わりに吐きまくる台詞ときたら、それこそ、

「おまえ……言ってる自分が恥ずかしくならねーか？」

耳を塞ぎたくなるのを乗り越えて、

「よっく、まあ、それで胸焼けを起こさないよな」

無駄に甘ったるく。

どこからともなく不意に湧いて出ては、デカイ図体で一真の視界を遮り。

「千堂お～～(ハート)」

人目も憚らないお気楽さで、堂々とジャレついてくるのである。

それは、もはや『スキンシップ過剰』だの『馴れ馴れしい』どころのレベルではなく、度外れたノータンキさに『鬱陶しさ』と『暑苦しさ』を練り込んで固めた強烈なトルネード。謂わば、一真にとって、まさに歩く『天災』のようなものであった。

天災は、いつ、どこで、何が起こるか分からない予測不能な事態だから『天災』と言うのだ。わずか

一ヶ月で、一真の高校生活はその天災に翻弄されっぱなしである。

それを言うと、自覚のない天災男は、

「そんなぁ……。いくらなんでも、それは、ちょっとヒドすぎない？ おれはただ、千堂とお友達になりたいだけだっつて」

口を尖らせるのだが。デカイ図体でスネてみせても実害が減るわけではなく、かえって鬱陶しさが増すだけであった。

なにしろ。いまだ成長期を地でいく身長は一真よりも二〇cm以上も高く、体重に至ってはおそらくその差が三〇kgぐらいあるだろうデカブツに、遠慮もなく、それこそ全身でベッタリ懐き倒されるのは見た目よりもはるかにしんどかったりするのである。

——マジで。

肉体的にも、精神的にも……。

人間、極端な潔癖性か対人恐怖症でない限りは多少のスキンシップなど気にならないものだが、そいつの場合は世間様の常識を逸脱しているとしか思えないのだ。まさに、大型犬が構ってオーラ全開でジャレついてくるかのごとく、なんのテレも遠慮もなかった。

もしかして。

偶然……。

——いや。つい、うっかり、目と目が合ってしまったその瞬間に、何かとんでもない『刷り込み』が入ってしまったのではないだろうか。『スキンシップ』というには過激すぎるその言動に、一真は、
(…ったく。何を考えてんだかなあ)

どっぷりと、ため息を漏らさずにはいられない。

これが、意味ありげな嫌がらせや含むモノありありなタチの悪いジョークならば、一真のアンテナにもすぐに引っかかるのだが……。

なんといっても。誰が、どこから見ても、

『自分より小柄な飼い主に、千切れるほど尻尾を振って懐き倒すペット』

——にしか見えないところが、一番の問題だったりするのかもしれない。

「おれと友達になって」

その好意を別口で実践する天災男は、本人的にはまったく害意がないらしい——だけに、よけいに始末が悪かった。

女生徒が嬌声を張り上げる甘いマスクも。モデルばりの八頭身も。本来ならば、同性相手では謂れの無い反発を招く元凶だったりするのだろうか。

妬みも。

嫉みも。

皮肉も。

羨望も。

凡人の思考回路を大きく逸脱してあまりあるノーテンキな言動の前では、まさに『糠に釘』状態なのだ。

「おまえ……それって、どうよ？」

それを口にして、

「何が？」

真顔で問い返されることほど、疲れるモノはない。

そいつの場合、誰にでも愛想がいいくせに。望めば、自薦他薦の区別なく好きに選び放題のくせに。なのに、関心のベクトルが一真の方に振り切っているのを隠そうともしないのだ。

その、一真ですら。

『何が、冗談で』

『どれが、本音で』

『いったい、どこまでが本気なのか』

——わからない。

そんな。少し……どころか一般人とはかなり感性のズレまくった大型犬の名前を、神奈木辰巳といった。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>